

アメリカの学校教科書におけるマーク・トウェイン

差別語の扱いを中心に



石原 剛



● いまなお生き続けるマーク・トウェイン

アメリカを旅すると、話し好きのお国柄ということもあって、見知らぬ人と世間話とあいなることがある。「マーク・トウェインの研究をしています」などと言うと、時折お気に入りのトウェイン語録を紹介してくれたりする。ところが、それが「ミスクォート」、つまりトウェインの言葉としてよく誤って引用される格言だったりすることも多い。例えば、「真実が靴を履こうとしている間に、嘘は地球を半周する」という有名な一節。よくトウェインのものとされるが、実は元々『ガリバー旅行記』で有名な英国の作家ジョナサン・スウィフトの言葉に後世の人間が味付けを施したものと言われている¹⁾。類似の例は実に多い。

では、なぜこのようなことが起こるのか。無論、実際のトウェインが指折りの警句家であったことは大きい。しかし、それに加えて、特にアメリカでは、トウェインが虚実の境界を超え、あらゆるアメリカ人から愛される国民的な

存在であり続けたからに他ならない。英国を代表する作家に由来する言葉まで、我々がトウェインの言葉としてしまうほど、アメリカでは広く身近な作家なのだ。

私自身、アメリカでなぜこれだけトウェインという作家が愛されているのか知りたくて、いろいろと調べてきた。しかし、調べれば調べるほど痛感するのは、トウェインや彼の作品が時代やジャンルを超えてあらゆる場面で登場するため、その全貌を明らかにすることなど土台無理な相談であるという、思えば当たり前の事実であった。彼は一九一〇年になくなったが、死してなおその存在感が色あせることはない。例えば、一九三〇年代にはアメリカを代表する缶詰スープ、キャンベルの広告にトレードマークの白スーツに身を包んだトウェインが登場し、一九六〇年代には名優ハル・ホルブルックが晩年のトウェインに扮装してトウェインの語りを舞台上で再現するショーがテレビで大成功を収め、一九八〇年代には代表作『ハックルベリー・フ